ガンのヘンリクスの哲学

加藤雅人著

創文社

加藤　雅人（かとう・まさと）
1955年京都府に生まれる．1978年京都大学文学部哲学科卒業．1983年京都大学大学院文学研究科博士後期課程学修．大阪女子短期大学を経て，現在，関西大学総合情報学部助教授．1989-90年ケンブリッジ大学トリニティカレッジ Postdoctral Researcher．京都大学博士（文学）．
〔主要業績〕「ガンのヘンリクスの照明説」（『中世思想研究』35号，1993），「ガンのヘンリクスにおける〈エッセ〉の問題」（『哲学研究』563号，1997），「トマス・アクィナスにおける存在論的二区分－言語の観点から」（『哲学』49号，1998）．J.マレンボン『後期中世の哲学 1150-1350』（翻訳，勁草書房，1989），『中世思想原典集成19　中世末期の言語・自然哲学』（共訳，平凡社，1994），『中世思想原典集成18　後期スコラ学』（共訳，平凡社，1998）．

〔ガンのヘンリクスの哲学〕

一九九八年一一月二五日　第一刷印刷
一九九八年一一月三〇日　第一刷発行

著者　加藤雅人
発行者　久保井浩俊
印刷者　藤原豊

発行所　株式会社　創文社
〒一〇二－〇〇八三
東京都千代田区麹町二－六－七
電話　〇三－三二六三－七一〇一
振替　〇〇一二〇－〇－九二四七二

著者との申し合せにより検印省略

藤原印刷・鈴木製本

ISBN4-423-17112-0　Printed in Japan

まえがき

本書は、ガンのヘンリクス（d. 1293）の思想をはじめてわが国に紹介し、同時に、哲学史上これまでほとんど看過されてきた一時期に光を当てつつ、一九八〇年代以降欧米で急速に進展してきたこの分野の先行研究を踏まえながら、ヘンリクスにおける「照明の形而上学」の構造を、認識論と存在論の統一的視点から解釈しようとするものである。ヘンリクスは一三世紀の思想家である。しかし、たんに歴史的関心のみから彼を取り上げるわけではない。われわれが〈知る〉や〈ある〉という言葉を使い続ける限り、「知識の正当化」や「存在の意味」をめぐる問いは今もそしてこれからも哲学的価値を持ち続けるからであり、われわれがこれらの問題について考えようとするとき、われわれの精神を照明する力が彼の思想にはあると信じるからである。

さて、序章において、ヘンリクス研究の現状を明らかにし、第一章〜第三章において、彼の認識論における「照明説」を考察し、第四章・第五章において彼の存在論における〈本質存在〉と〈現実存在〉の説を考察し、第六章において、彼の「照明の形而上学」について「本質のリアリズム的解釈」という視点からの解釈を提示する。照明説とは、この世界の感覚的経験に依存しないア・プリオリな知識、たとえば、完全な円、幾何学的な点や線や面、完全な正義、理想的な美、存在そのもの、といった諸概念やそれらの諸概念を含む命題の真理を、われわれが現に持っているという事実を説明し正当化しようとする原理である。また、〈現実存在〉と〈本質存在〉とは、存在の二つの側面すなわち、ものが「現実に〈ある〉」という意味の存在と、それが「何で〈ある〉か」という意味の存

在である。そして、〈本質存在〉は〈現実存在〉とは独立にある種のリアリティを持ち、しかも〈本質存在〉が〈現実存在〉に先立つとする考え方が「本質のリアリズム的解釈」である。

ところで、従来の解釈によれば、ヘンリクスの認識論の中心にある照明説が果たしていた機能とは、人間のア・プリオリな知識の確実性を保証すると同時に、有限存在と無限存在の間のアナロギア的な隔離に架橋し、超越的な無限存在を、有限な人間の形而上学における知の対象として確保することであった。したがって、その照明説を批判したスコトゥスは、照明説の代替として、無限存在と有限存在との隔離を埋めるために「存在の一義性」を主張する必要が生じた。このような従来の解釈に対して、本書は次の点を指摘する。ヘンリクスの照明説には発展的側面があり、じつは後期のヘンリクスは伝統的な照明説から実質的に後退していた。にもかかわらず、有限存在と無限存在とのアナロギア的隔離への架橋という機能に支障をきたすことはなかった。そのことが可能であったのは、彼の認識論の下に「本質のリアリズム的解釈」という存在論的基礎があったからである。したがって、従来の解釈は少なくとも後期のヘンリクスには妥当しなくなるのである。

本書は、筆者がこれまでにさまざまな機会に発表した次の諸研究を基にして、それらを大幅に書き改め発展させるという仕方で成立した。

序　章　「ガンのヘンリクスの思想発展について」、『大阪女子短期大学紀要』第一六号、一九九一年一二月、一―九頁。

「*Henrici de Gandavo Opera Omnia*, Leuven, 1979-」（書評）、『中世思想研究』第三七号、中世哲学会、一九九五年九月、一五七―一六〇頁。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「ガンのヘンリクス」、『西洋哲学史［古代・中世編］』内山勝利／中川純男編、ミネルヴァ書房、一九九六年七月、二五九―二六三頁。

第一章　「ヘンリクスにおける真・真理・純粋真理―Summa, a.1」、『中世哲学研究』第九号、京大中世哲学研究会、一九九〇年一〇月、四三―五一頁。

第二章　「ガンのヘンリクスにおける知の確実性の問題」、『関西哲学会紀要』第二五冊、関西哲学会、一九九一年三月、六―一一頁。

「ガンのヘンリクスとドゥンス・スコトゥスの論争―新アカデメイア派の懐疑論をめぐって」、『中世哲学研究』第一〇号、京大中世哲学研究会、一九九一年一〇月、五一―六二頁。

第三章　「ガンのヘンリクスの照明説」、『中世思想研究』第三五号、中世哲学会、一九九三年九月、九三―一一八頁。

第四章　「ガンのヘンリクスにおける〈もの〉の存在構造」、『中世哲学研究』第一四号、京大中世哲学研究会、一九九五年一一月、四三―五四頁。

「ガンのヘンリクスにおける〈エッセ〉の問題」、『哲学研究』第五六三号、京都哲学会、一九九七年四月、七六―一〇八頁。

第五章　「フォンテーヌのゴドフロワ『任意討論集』」、『中世思想原典集成一八　後期スコラ学』上智大学中世思想研究所・稲垣良典編訳・監修、平凡社、一九九八年九月、一〇一―一六一頁。

第六章　『西欧十三世紀の第4四半世紀におけるガンのヘンリクスの思想』平成六～八年度文部省科学研究費補助金（基盤研究C）研究成果報告書（研究代表者　加藤雅人、課題番号〇六六一〇〇一四）、一九九七年三月、一―五五頁。

「ガンのヘンリクスにおける『第一の認識対象』」、『中世哲学研究』第一六号、京大中世哲学研究会、一九九七年一一月、四一―五五頁。

私事になるが、本書の原型となった論文「ガンのヘンリクスの哲学」によって、一九九八年三月、京都大学から

「博士（文学）」の学位を取得した。貴重な時間を割いて審査にあたられた、山本耕平、内山勝利、川添信介の先生方に対して、この場をかりて心より謝意を表する。

また、出版に際して、創文社の小山光夫氏に大変お世話になった。記して、感謝する次第である。

なお、本書を、一九九五年十月二日、この世界の身体から分離した父の魂に捧げようと思う。

（付記）本書は、平成十年度文部省科学研究費補助金（研究成果公開促進費）の交付を受けて出版される。

目　次

まえがき……v
序章　ガンのヘンリクスとは、誰なのか……三
第一節　序　論……三
第二節　ヘンリクスの経歴と著作……四
一　略　歴……四
二　パリでの活動……五
三　著　作……七
四　著作の執筆時期……一〇
第三節　ヘンリクスの思想傾向……一一
一　プラトン的要素……一三
二　アリストテレス的要素……一三
三　ヘンリクスの思想傾向――まとめ……一四
第四節　結　論……一五

第一章　認識論における照明の位置……一七
第一節　序　論……一七
一　照明説の文脈……一七
二　アウグスティヌスの照明説……一九
三　照明説がはらむ諸問題……二三
四　なぜ、ガンのヘンリクスの照明説なのか……二三
第二節　認識のメカニズム……二六
一　魂とその諸能力……二六
二　感覚（想像力）と知性……二八
三　感覚（想像力）と知性の違い……三一
四　能動知性の内的照明……三四
五　第一概念から第一原理へ……三六
六　理性の合理的プロセス……四〇
七　認識のメカニズム――まとめ……四三
第三節　知の構造と照明の位置……四四
一　『定期討論のスンマ』冒頭の知論……四四
二　学　知……四六

三　真　理……四八
四　純正真理と照明……五三
五　知の構造と照明の位置――まとめ……五九
第四節　初期認識論の意図……五九
第五節　結　論……六一
第二章　知の確実性と照明……六三
第一節　序　論……六三
一　中世における懐疑論……六三
二　問題の所在……六四
三　知の確実性の基準……六六
第二節　ヘンリクスの議論……六七
一　範型的真理観……六七
二　不確実性の三つの理由……六八
三　確実な知と神の照明……七一
第三節　スコトゥスの照明説批判……七三
一　懐疑論への反論……七三
二　スコトゥスの確実な知……七三

三　第一の理由に対するスコトゥスの批判……七八
四　第二の理由に対するスコトゥスの批判……八〇
五　第三の理由に対するスコトゥスの批判……八一
第四節　結　論……八四
第三章　照明説の思想発展……八七
第一節　序　論……八七
一　問題の所在……八七
二　ギルベルトゥスの照明説とそれが残した問題……八九
第二節　初期の説明方式――『定期討論のスンマ』第一項……九一
一　照明の三つの説明方式……九一
二「霊的光」……九三
三「形相ないし形象」……九五
四「姿形ないし印影」……九七
第三節　後期の説明方式――『任意討論集』第九巻第一五問……九九
一　初期と共通する説明……九九
二　後期の二つの説明方式――「能動知性」と「技術知」……一〇一
三　初期から後期への発展……一〇四

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

四　照明説の思想発展の背景にある存在論……一〇五
第四節　ヘンリクスの照明説の根本にある思想……一〇八
一　照明説の諸問題とさまざまな解釈……一〇八
二　ギルベルトゥスの照明説との比較――オントロジスムの危険……一一〇
三　トマスの照明説解釈……一一三
四　トマスとヘンリクスの比較……一一五
五　ヘンリクスの照明説の根本にある思想……一一七
第五節　結　論……一一九
第四章　本質・存在・〈もの〉……一二一
第一節　序　論……一二一
第二節　〈存在〉をあらわす語彙の曖昧さ……一二三
一　〈ある〉と〈あるもの〉……一二三
二　〈ある〉と〈存在する〉……一二四
三　〈存在する〉の曖昧さ――まとめ……一二六
四　〈ある〉と〈本質〉……一二七
第三節　なぜ、ガンのヘンリクスの存在論なのか……一二九
一　トマス・アクィナスのエッセの思想……一二九

二　アリストテレスのオンと混同されたトマスのエッセ……一三〇
三　〈存在する〉・〈存在〉と混同された〈ある〉……一三二
四　なぜ、ガンのヘンリクスの存在論なのか……一三三
第四節　本質・存在・〈もの〉……一三四
一　複合的エッセと非複合的エッセ……一三四
二　〈本質存在〉と〈現実存在〉……一三六
三　〈もの〉……一三九
第五節　結　論……一四三
第五章　本質と存在の志向的区別……一四七
第一節　序　論……一四七
一　問題の所在……一四七
二　歴史的概観……一四八
第二節　実在的区別――エギディウス・ロマヌス……一五一
一　本質と存在の実在的区別……一五一
二　実在的区別の三つの理由……一五四
三　本質と存在の〈もの〉化……一五七
第三節　志向的区別――ガンのヘンリクス……一五八

一　実在的区別の説批判……一五八
二　本質と存在の志向的区別……一六三
第四節　同一性――フォンテーヌのゴドフロワ……一七一
一　実在的区別の説批判……一七三
二　志向的区別の説批判……一七八
三　本質と存在の同一性……一八四
第五節　結　論……一八六
第六章　照明の形而上学……一八九
第一節　序　論……一八九
一　照明説と存在の一義性……一八九
二　照明説の機能主義的モデル……一九二
三　二機能の区別――ボナヴェントゥラとヘンリクス……一九三
四　スコトゥスの照明説批判……一九四
五　本章の目的……一九六
第二節　照明説の思想発展とその問題点……一九七
一　照明説の思想発展の方向性……一九七
二　照明説の思想発展がもたらす問題……一九八

第三節　ア・プリオリな神認識……二〇九
一　被造物を起源とする神認識――「自然的」と「合理的」……二〇九
二　普遍的な神認識の三段階――「最も一般的」「比較的一般的」「一般的」……二一一
三　被造物を起源とする神認識の諸段階――まとめ……二一二
四　無限定的な有――「未・限定的」と「非・限定的」……二一三
五　二種類の有の関係――「帰属のアナロギア」……二一七
六　有の混雑した不分明な知に挿入された神認識……二二〇
七　ア・プリオリな神認識――まとめ……二二三
第四節　〈本質〉のリアリズム的解釈……二二五
一　〈もの〉の三領域……二二五
二　〈本質〉と存在……二二七
三　〈本質〉とイデア……二二九
四　〈本質〉の存在論的位置づけ……二三六
第五節　結　論……二四一
註……29
文献表……18
索　引……11
英文目次……1

ガンのヘンリクスの哲学

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com